温泉に行こう

南風　こまち

どんよりとした寒空に、サンタクロースの衣装が映える季節になった。出かける寸前まで布団でぬくぬくと惰眠を貪っていた私は、マスクで見えないのをいいことに目元だけ軽くメイクする。外に出て寒さに身を震わすと、街を行く人々は着ぶくれし、ご多分に漏れず私もその一人だった。

始業三分前にオフィスに入り、デスクトップを立ち上げたところで朝礼。いつものようにハゲ部長がダラダラと話す。眠い。マスク越しでどうせばれんだろうと小さく、そして少しわざとらしくあくびをする。

「では最後に、そろそろ忘年会の季節です。幹事を募りたいのですが、我こそはというやる気のある人は？」

目の前のハゲツルにしてみればアルコールの助けを借りたところで部下の本音を引き出すこともできず、せいぜい酔っていたことを盾にパワハラのレッテルから逃れようとするだけのイベントだ。誰も手を挙げるはずが無かった。

好機だ。

私は少しの間を置いて、手を挙げた。

＊　＊

ツルッパゲの当惑した眼差しを無視して、私はデスクトップに向かって算段に取り掛かった。やることは山ほどある。いかに根を詰めすぎず、いかに手を抜きすぎず、いかに会社からぶん取るか。そうこうしているうちに昼休みだ。私はビル一階のコンビニでおにぎりと肉まんを買い、エレベーター陰のベンチに陣取る。

「珍しいですね、先輩が忘年会の幹事に手を挙げるなんて」

後輩が男子トイレから出てきて、手を拭きながら隣に腰を下ろす。胸ポケットを膨らませているゼリー飲料が彼の昼食のようだ。

「部長のあの顔見ました？　ひょっとこみたいに目を丸くして。朝っぱらから吹きそうになりましたよ」

「ああ。傑作だったな」

私はそう短く返し、スマホでお気に入りのサイトを呼び出す。

「でも、どういう風の吹き回しですか？　先輩、会社での飲み会とか嫌ってたじゃないですか」

「たまには積極的にやらないとな」

そのまま後輩の話に適当に相槌を打ちながら、私の目は画面に表示された日本地図に目を落とす。

さて、今度はどこに行こうか。

もうすぐ冬のボーナスが入る。実家に帰省する時に使うぶんを差し引いても、いくらか手元に残る。寝かせておいても仕方ない。どうせこのご時世、どこに行くにもがら空きで安く行けるのだ。

「先輩、聞いてます？」

「ん？　ああ、すまない。何だって？」

「だから、店はどうするんですか？」

「店？　何の話だ？」

「何の話って、忘年会に決まっているじゃないですか」

「忘年会？　なんだ、そんなことか。それならもう決まってるよ」

私はあっさりと言い、肉まんの残りを口に押し込む。そのままスマホの画面を伏せ、おにぎりの包みをはがす。

「えらく用意周到ですね」

「ああ」

ボーナスがあるとはいえ、さすがに遠出は厳しい。近

場でゆっくりできそうなところとなれば、関東圏になる。ふと、雪景色が見たいと思った。手っ取り早く雪景色と温泉を楽しむなら草津とか鬼怒川とかだろうか。

後輩の話を適当に聞き流しつつ、北関東の地図を拡大する。でも、あまりぴんと来るものはなく、そのまま地図を甲州の方にスライドさせる。

ふと、河口湖の近くに温泉のマークを見つけた。さらに拡大してみると、河口湖ではなく山中湖だった。温泉マークをタップしてみると『富士山と山中湖を一望できる温泉』と銘打った宿が出てきた。高級路線の宿だったが、日帰り入浴もできるようだ。ここにしよう。

「先輩、やっぱり気が進みませんよ。忘年会なんて」

後輩がそうぼやき、ゼリー飲料を一息に飲み干す。

「安心したまえ、策はあるよ」

私は残り半分のおにぎりを口に詰め込み、後輩を残してオフィスに戻った。口元に海苔がついたかもしれないが、どうせマスクでばれやしない。

＊　＊

コロナを理由に忘年会を中止にするメールを一斉に送り、デスクトップの電源を落とす。デスクトップ画面とにらめっこしていたハゲ上司が怪訝な表情を浮かべ、何か言いたげに近寄ろうとしてきたが、私がタイムカードを押す方が早かった。明日は有休、明後日から冬季休業。年が明ければみんな忘れている。

ハゲ上司にへこへこするクソイベを回避し、ルンルン気分で帰宅する。クローゼットからバッグパックを取り出し、タオル、着替え、化粧ポーチ、ドライヤーなどをぽいぽいと放り込む。

突然、スマホがブーブーと鳴動を始めた。発信者を見てみると後輩だ。

「どうした、何かトラブルか？」

『あ、先輩、いえその、忘年会を中止にしたのって』

「何だ、君は気が進まないと言っていたじゃないか。不満なのか？」

『いえ、むしろ助かりました。ありがとうございます』

「ああ、クソイベはスキップするのが最善策、スキップできないなら逃げるが勝ちさ」

ハンズフリーにして、時刻表を検索する。山中湖には新宿から高速バスで二時間くらいのようだ。昼前に現地に着けば、そのまま昼食を済ませて温泉に行ける。しかし、コロナのせいで運休になっているバスが多く、あまりいい時間の便が無い。

『先輩って最初から忘年会を中止にするつもりだったんですか？』

「もちろん。コロナって絶好の言い訳もあったし、言いなりになってハゲを図に乗らせるのも癪だからね。権限はこうやって使うんだ、覚えておくといい」

ＪＲと路線バスを乗り継いで行くこともできそうだ。高速バスより遠回りになるけど、こちらはちょうどいい時間のものがあった。これで行こう。

『あの、先輩』

「ん？」

『その……忘年会はおじゃんになりましたけど、良かったら二人で飲みに行きませんか？　二人きりで忘年会、みたいな』

「ふむ、考えておくよ」

二言三言会話して、電話を切る。

後輩の顔を思い浮かべる。彼が入社してからもうすぐ一年になる。未だに頼りない部分も使えない部分も多いが、着実に成長してきている。もう少し指導して、ある程度一人前になったら……。

「転職しよ……」

＊　＊

翌日。富士山駅に着いたのは昼前だった。生憎曇っていて富士山はまるで見えないが、富士急ハイランドの建物が遠くに見えた。温泉のある山中湖にはここから路線バスで三〇分弱だが、次のバスまで小一時間くらい暇だ。早めのお昼にしよう。

駅の地下に吉田うどんののぼりを掲げた店があった。そこに入り、肉うどんを注文する。

「肉うどん、お待たせしました。ちくわ天はおまけです」

「ああ、それはどうも」

トッピングはセルフサービスで、ねぎ、すりごま、天かすを少しずつ入れる。ふと、すりだねと書かれたシールの貼られた壺が目に入った。横に『激辛注意！　かけすぎても当店は一切の責任を負いません』とのメモがある。蓋を開けてみると、いかにも辛そうな七味唐辛子が詰まっている。ひとつまみだけうどんのつゆに浮かべ、空いた席に向かう。平日のやや早い時間ということもあり、がら空きだ。

いただきます、と割り箸を割って麺をすする。瞬間、思いっきりむせた。刺すように辛い。あまりにも辛い。ほんのひとつまみしかすりだねを入れなかったはずなのに。コップの水を半分くらい一息に飲み干すが、悪いことに唐辛子が喉奥に張り付いたようだ。涙目になりつつ痛みに耐えながら麺をすすると、飲み込むたびに激痛が

走った。肉は甘めに味付けされ、麺は太くも柔らかくて食べやすい。すりだねの辛さを甘く見さえしなければ、美味しいうどんとして旅の一ページになっただろう。

地獄のようなうどんをやっとの思いで完食し、地上に出る。あまりに口の中が辛く、お土産屋で富士山ソフトとかいうものを注文した。かなり寒いのにソフトクリームを食べるなんて正気ではないが、私はこれから温泉に入る。多少の寒さは怖くない。

富士山ソフトは上部がミルクソフト、下部が青バラソフトで冠雪した富士山を表現している。辛くてろくに味は分からないけれど、いたわるような冷たさに辛みがようやく退いていった。

土産物店の中のベンチでアイスを食べながら、商品棚にざっと目を走らせる。ほうとうや山梨ブドウのお菓子、地酒や富士山を模したストラップなど、いかにも富士山麓らしいラインナップだ。ごつい長靴も置いてあるが、これは登山用なのだろうか。

さて、もうすぐバスの時間だ。私はバスターミナルに向かう。地元の方と思しきおじいさんと二人、黙ってバスを待つこと数分。少し遅れて路線バスがやってきた。

＊　＊

街中はほとんど雪が無いが、奥の山々は既に白く染まっている。街はずれの山道に入ると、道路の両脇に所々雪が寄せられているのが見えた。

バスは途中で客を乗せるでもなく、降ろすでもなく。次々とバス停を素通りしていく。車内には私とおじいさん、そして元から乗っていた女子高生がめいめいに腰を下ろしている。

途中、長いトンネルに入った。トンネルを抜けるとそこは雪国……ではなく、既に収穫を終えて真っ茶色の地面を晒した畑が広がっていた。来るべき冬に向け、素っ裸で身震いしているかのような寒々しい光景だった。

村役場のバス停でおじいさんが降りた。そこから走ること数分。鈍い色合いをした山中湖が見えてくる頃になって、案内に目当てのバス停が表示された。降車ボタンを押すと、バスはゆるゆると減速しながら路肩のバス停の前に停まった。

屋根付きのバス停は人っ子一人おらず、私を降ろしたバスが消えるとびゅうびゅうと吹きすさぶ風の音が聞こえるばかりだ。

スマホの地図アプリによると、ここから歩いて一〇分くらいで温泉宿に着くようだ。湖畔を道なりに歩く。

広々とした湖の上を、踊るように冷たい風が吹き抜けていく。歩くたびに、呼吸をするたびに肺の中に山と湖の空気が流れ込み、ささくれだった都会の空気を追い出していく。空を見上げると、雲が流されて青空が広がりつつある。雪景色は拝めなさそうだけど、遠のく雲に向かって背筋をぐっと伸ばしてみる。いい気分だ。

五分ほど歩いたら分かれ道に辿り着く。森に続く上り坂へと歩みを進めることさらに五分ほど。視界の奥、木々の間に建物が見えた。一歩一歩歩くたびに少しずつ近付いてくるそれが、今日の目的地。山中湖温泉だ。

思えば遠くに来たものだ。私は深く息を吸い、そして吐き、歩幅を広げた。

＊　＊

洋風の建物はホテルも兼ねているようだが、ロビーに入ってもフロントにホテルマンが一人いるだけでお客さんの姿は見えない。チェックインには少し早い時間なのだろう。いずれにせよ、人が少ないぶんゆっくりできそうだ。日帰り入浴の旨を伝え、料金を支払う。観光地価格というやつなのだろうか、野口英世が一人帰らぬ人になった。タオルは手持ちの物があるから断った。

ロビーから長い通路を奥へ奥へと歩く。ふかふかのじゅうたん敷の床に、柔らかな照明の光にここがホテルであることを実感させられる。

突き当たりの壁に『←女湯』と表示があった。それに沿って左を見ると、奥に赤紫色の暖簾が見えた。白抜きの文字で『女』と大書されたそれをくぐり、引き戸をカラカラと開ける。靴を脱いで、板張りの床を踏みしめながら脱衣所へと入っていく。

＊　＊

マスクを外し、鏡の前で化粧を落とす。薄い化粧しかしていないのに、くずかごに吸い込まれる化粧落としのシートには濃い肌色がべったりしている。服を脱ぎ、ざっと畳んでロッカーに入れる。脱衣ロッカーの鍵を手首に巻き付け、タオルを片手に大浴場への重い引き戸を開ける。全身を暖かい湯気が撫で、次の瞬間にはざらりとした御影石造りの床に水濡れを感じていた。

人の数はまばらながら、シャワーの流水音、木桶が床に置かれる音、浴槽に源泉が流れ込む音が立ち昇る湯気でくぐもりつつ反響し合う。

まずはかけ湯をする。手桶いっぱいにお湯を掬い、勢いよく肩から流す。流れ落ちたお湯が肌の冷たさを盗み、床に弾け落ちる。反対側の肩にもばしゃり。

かけ湯を済ませ、そのままお湯に浸かってやろうとも思ったけど先に体を洗ってしまうことにした。シャワーエリアの一角を陣取り、まとめた髪をほどく。まだ濡らしていないはずなのに、もう湯気で湿っている。

頭からシャワーのお湯をかぶり、肌寒さも、汗も、全部落としていく。お湯が止まる度にレバーを下げ、またお湯を出す。シャンプーを泡立て、頭髪の奥へ奥へ、揉み込むように十本の指に力を込める。洗い終えるとまたシャワーのお湯を出し、もこもことした泡を流し落としていく。肌から泡の感触が消え、そっと顔を手で拭い目を開ける。心なしかさっきよりも明るくなった視界の目の前には、湯気でぼんやりと曇った鏡。止まる寸前の弱々しいシャワーの流湯を浴びせかけると、びっしょりと垂れた黒髪の間にほんのりと赤く生き返ったような表情を浮かべる私がいた。

続いて、ボディーソープのボトルに手を伸ばす。馬のシルエットが描かれているが、馬油が含まれているのだろう。両の掌でボディーソープを泡立てる。そして、そっと体中に泡を這わせ、包み込んでいく。昔はタオルでこすったりしていたものだが、肌があまり強くないため今はもっぱら掌が頼りだ。シャワーで全身の泡を落とすと、さっきよりも暖かくつるんとした肌感触が掌に流れ込んでくる。

最後に洗顔をして、化粧落としの仕上げをする。少しひんやりとした泡も、暖められた頬の熱を吸い取ることはできない。息を止め、目をつむる。暗闇の中、自分の掌を頼りに仮面を溶かしていく。手探りでシャワーのレバーを下ろし、お湯で泡を落としていく。細かく額や鼻先、瞼、頬、唇、顎を柔らかなお湯がくすぐっていく。お湯が止まり、軽くタオルで顔を拭いて目を開ける。生き返った。

シャワーはこんなものでいいだろう。暖められた体はせかせかとした動きをやんわりと拒み、それに合わせて私はゆっくりと立ち上がる。さて、温泉に入るとしよう。

＊　＊

大きな檜風呂の中にはおばあさんが一人、隅の方で気持ちよさそうに目を閉じているだけだ。私はおばあさんから少し離れた場所に入ることにした。

足先に少し熱い感触が伝わり、一瞬心が怯む。でも、それを無視して膝小僧の辺りまで浴槽に足を進める。そろそろと身を源泉の中に浸していき、ふわりと腰を下ろす。

「あ、ぁぁあ〜……」

深く安らぎの溜息をつきながら、肩まで優しい暖かさに包まれる。じんわりと溶けていくようなぬくもりの中に居座ろうと、頭の上に湿ったタオルを乗せる。

体中にのしかかる湯の重さの中で、思いっきり両手両足を伸ばしてみる。不規則にばきり、ぼきりと関節が鳴る。限界まで四肢を伸ばし、そしてひと息に弛緩させる。ため込み続けた疲れが、湯の中に絞り出されていく。

お湯の効能とかはよく分からないが、透明ながらも少しとろりとしたお湯は私の気付かないうちに体の中に熱として分け入っていく。そして、私の冷たさを奪い、そっと心身の破断を細やかに修復していく。

ふと、手を肩に伸ばす。指先にそっと力を込めて、凝り固まった肩をほぐす。一度、二度、三度、四度、何度も指先に力を入れては、少しずつ位置を変えていく。日々のデスクワークで蓄積された岩は砕け始めるまで少し時間がかかったが、いざひび割れが入るとそこからはあっという間だ。背後霊の呪縛のような重さは、やがて湯気と共に消えていく。

そっと目を閉じる。何が頭に思い浮かぶでもない。ただ瞼の裏の暗闇の中で、温泉のぬくもりが身も心もとろけさせる快感だけを味わう。

ここが楽園か。

ここが天国か。

温泉が、もっとここにいていいよと言ってくれる。

もう少し。もう少しだけ、ここにいよう。

もう少し。

あと少しだけ。

……うん、そろそろいいだろう。

少しばかり内風呂に飽きてきて、おもむろに目を開けてみる。すると、大きな窓の向こうには。

「晴れた……」

富士山が大きく私の瞳に飛び込んできた。

少し緑がかった窓ガラス越しではなく、直に目で見たい。私はなおも引き留めようとする内風呂の湯から立ち上がる。肌を滑り落ちていく流れと、体の中に抑え込めないぬくもりを身に纏い、内風呂を出た私は外に続く引き戸を開けた。

＊　＊

寒いはずの外気も、内風呂から上がったばかりの私にとってはさしたる敵ではない。

空を流れていたはずの雲はいつの間にか遠のき、富士山と山中湖、そして青空の三重青を見渡す。今は冬だから木々は葉を落とし森は茶色く寒々しいが、秋に来れば

紅葉とのコントラストがさぞや綺麗だっただろう。
露天風呂はごつごつとした岩風呂で、細かい湯気が湯面の上を風に乗ってたなびき、そして消えていく。私はそっと湯船に歩み寄り、入っていく。内風呂よりぬるいのは外気に晒されているからだろう。
冬の優しい日光を全身に感じるのは、どこかむず痒い気がする。でも、四阿の下に身を隠す真似はしたくない。内風呂と比べると少し物足りないぬくもりに包まれながら、全身を太陽と富士に向かってさらけ出す。
「天国って、こういうとこなのかもな……」
また一つ、大きく伸びをする。
富士山。
その均衡のとれた裾野は、薄い青で染まっている。頂の冠雪の白が目に眩しい。薄い雲が山頂付近にたなびいている。この季節に、この状況においてもあの山に挑む人はいるのかもしれない。
山中湖の湖面は近くで見るとやや灰色がかっているような気がしたが、湯に浸かりながら見てみると陽の光に照らされて、濃青の湖面に陽光が眩い。所々、小さくスワンボートや観光船が浮かんでいる。どうせ気ままな一人旅だ、時間があったら帰りに寄り道するのも悪くない。
頭からタオルがずり落ちそうになり、慌てて押さえる。タオルを直した手に目をやると、すっかりお湯でふやけてしわしわになってしまっている。そろそろお湯の中でまったりするのもやめにして、気分転換がてらサウナにでも入ってみようか。

＊　＊

サウナが好きな人のことをサウナーと呼ぶらしいが、私はそこまでサウナが好きではなかった。むしろ、特に小さい頃はバカみたいに暑苦しくて大嫌いだった。大学のゼミでサウナーの友達ができたのが転機で、サウナの入り方を伝授してもらってから自然と足が向くようになった。とはいえ、今でもサウナーを名乗れるほど本格的に楽しむわけでもないし、サウナがそこまで好きなわけでもない。でも、今も続く彼女との友情に報いようという気持ちが、私のどこかにあるのだろう。
全身にかけ湯をして、タオルでざっと体を拭く。ラックからマットを一枚取り、木製の扉に向かう。取っ手に触るだけでじわじわと熱い。重い扉を押し開けると、ぶわりと熱気が襲い掛かる。
中に入ると、年齢のよく分からない女性が奥でじっと目を閉じている。邪魔にならないように、そっと扉を閉めた。私が身に纏っていた温泉の空気は実は冷気だった。その冷気もほんの一瞬で消えてしまった。
サウナは上の方が熱い。暑い、と言うべきなのかもしれないが、そんな雑な思考ももうもうとした熱気に阻害されてままならない。座る部分が上下二段しかない小さめのサウナで、私は思い切って上段を選ぶ。入った時以上に熱気が迫りくる。
マットを敷き、腰を下ろす。分厚い木の壁に室温計が取り付けられているが、薄暗くてよく見えない。でも、何度であれ同じことだ。この暑さ（熱さ?）の中で私はこってりと汗を流す。
そろそろと息を吸い、ゆっくりと吐く。不注意に深呼吸すると肺をやけどしそうになる。吸い込む空気が私の内部より熱いというのは、どうしても違和感というか、遠い場所に来た感覚を覚える。いつだったか真夏の四国を旅した時と似たような感じだろうか。
温泉と違い、明らかに異質な敵として体が熱を受け止めている。早くも私の全身に丸々とした汗粒がたくさん浮かび上がり、時にぶつかり合いながら床や腰掛けに垂れていく。サウナーの友達が言うには、私は代謝が良くてサウナを楽しむ素質があるそうだ。悪い気はしない。
サウナの隅からこぽこぽと音がした。焼石の上にある水栓が開く。しゅうしゅう、ふしゃふしゃと音を立てながら焼石に水が滴り始めた。それを見ているだけで、心なしか室温がぐんと上がった気がする。
それにしても、サウナというのは不思議な空間だ。温泉のはずなのに温泉と違い、水の音もしなければ木桶やシャワーが反響する音とも隔絶されている。柔らかな陽光を遮断し、頼りになるのはほの暗い電球の光だけだ。誰とお喋りをするでもなく、各々がちょうどいいと思える頃合いまで、熱と向き合う。一度、スーパー銭湯のサウナに入った時はテレビが設置されていて、バラエティ番組の騒々しさに興醒めしたものだ。
私は普段から、ちょうどいい熱に浸って生きている。そりゃ、夏は暑いし冬は寒い。でも、油断さえしなければ生きていける。耐えかねる熱は料理とか、そういうもののために日々従えている。温泉は、そんなちょうどよさの極致なのかもしれない。一方で、サウナはそんなちょうどよさとは対極にいる。理想からあえてはみ出してみて、そこではみ出した自分を体験できる。
先客が先に灼熱地獄を後にした。ドアの開け閉めで流れ込んだ貴重な冷気は、余韻を感じることさえもほとんど許さずに消えてしまった。
大粒の汗が睫毛を伝い、目に入ってくる。目の痒さがそろそろ潮時じゃないのかと教えてくれる。でも、もう少しだけ。少し苦しいけど、なぜか立ち上がって元の世

界に戻るのが惜しまれる。
もう少し。
あと少し。
自分との我慢比べが始まったら、私が意地を張り始めたら、それが終了の合図だ。
まだいける。
ならば、出るとしよう。
私はそっと立ち上がり、重い扉を引き開けた。
暖かく感じていたはずの室温が、心地いい冷気として私を優しく包み込む。

＊　＊

サウナを出て、またかけ湯をする。今度は頭からだ。ざっと汗を流して、サウナの隣にある小さな水風呂に飛び込む。温泉で唯一苦行と呼ぶべきは、あまりにも過酷なこの落差だろう。とても信じられないが、体にはいいらしい。フィンランドでは冬場になるとサウナを出て速攻真冬の海に飛び込む、なんてサウナーの姿が何人も見られるらしい。
そんな余計な事を考えて水風呂に入るのをためらっていても仕方ない。意を決して、ざぶざぶと入っていく。
刺すような冷たさ。
心臓の鼓動が一気に大きく、早くなる。
肩まで漬かること数秒。ざばりと体を起こし、逃げるように水風呂から出る。どくん、どくんと胸の暴れを深呼吸で押さえつつ、私は露天風呂に向かう。

＊　＊

さっきよりも陽が傾いていて、四阿に入らないと西日が眩しい。でも、今の私は四阿にも、そして露天風呂そのものにも用は無い。私はプラスチック製の長椅子に、熱を帯びて妙に重たくなった身体を横たえる。サウナを出て水風呂を浴びた後は、こうやって体を休めるのがいいそうだ。
外気に晒され続ける長椅子は芯から冷たく、水風呂を浴びたはずなのに座るだけでひやりとする。でも、プラスチック故にすぐに私の体温に順応してくれる。
それにしても、この椅子は富士山の真正面に向いている。視界にぎりぎり収まりきるくらい大きな富士の山は西日で冠雪が淡い薄紅に染まり、裾野はさっきよりもやや紫がかっている。思ったよりも長い間サウナにいたようだ。
水風呂や冷え切ったベンチではとても奪い取れなかった熱が、湯気として消えていく薄い汗とともにじわじわと体表に湧き上がってくる。温泉に浸かっている時のようなまったりしたぬくもりではない。さっぱりとしたシャープな暖かさに、今の私は無敵になった気分だ。
思い切り深く息を吸い、そして勢いよく吐き出す。富士の裾野の澄んだ空気が、全身に行き渡っていく。二度、三度と深呼吸をして、私はベンチから起き上がる。最後に露天風呂に少しだけ浸かって、上がるとしよう。
名残惜しく富士山と山中湖を眺め続け、結局だらだらと長湯してしまった。

＊　＊

風呂で汗を流してさっぱりしたのに、風呂上りに暑くて汗をかくというのは人類に運命づけられたジレンマと言えるだろう。私もご多分に漏れず、ドライヤーで髪を乾かしながらそのジレンマに眉をひそめていた。
でも、この汗は温泉のお土産みたいなものだ。そして、私にはこの汗を帳消しにできるとっておきがある。
脱衣所を出て少し歩くと、ベンチの横に風呂上がりのお楽しみが佇んでいた。
温泉上がりに自販機に向かい合う時ほど心躍る瞬間もそうそう無いだろう。幾枚かコインを入れ、１７と番号を入れる。すると、エレベーターのようなアームが商品まで迎えに行く。１７と番号の振られた棚に整然と並んだボトルが、ひとつだけ籠へと押し出される。商品を入れた籠が取り出し口まで下降し、ガコンという音を立てて取り出し口にお目当ての物が転がる。
手を伸ばし、ひんやりとした硬い感触を楽しみながら蓋を開ける。そして、口をつける。とろりとして、僅かに甘い、よく冷えた瓶詰め牛乳。ものの数秒でひと息に飲み干してしまう。少し物足りない今ぐらいの量がちょうどいい。
ぷはぁ、と瓶から口を離して大きく息をつく。牛乳のさっぱりした冷たさが喉から食道を伝い、胃に降りていく。温泉で芯からぬくぬくになった身体に快い刺激が走る。これは風呂上りに汗ばんでいるからこそ美味しいのだ。
空き瓶を回収籠に入れて、私はフロントに戻る。ホテルマンが深々と頭を下げて見送ってくれた。
外に出ると、既に辺りは薄暗くなりつつあった。淡い薔薇色に染まっていたはずの富士山は今や薄墨を流したような冷たい色合いに染まり、森を抜けた先にある山中湖は鉛色と呼ぶのがふさわしい。
坂を下り、湖畔に出てバス停を目指す。四隅が朽ち始

めた木製のベンチには誰もいない。腰を下ろそうとした私の目に、遠くから路線バスの光が小さく届いてきた。